在学中の思い出

張 志偉

私は、香港から来てほぼ20年経った。最初、関西学友会日本語学校で一年の日本語本科コースを修了し、翌年の1980年に文部省奨学金を受け、大阪市立大学文学研究科の研究生となった。当時、市大文学部研究科には、留学生の特別入試制度が設けられなくて、志願の留学生には、専門科目はもちろんだが、第一外国語のほかに、第二外国語も必要とされ、留学生にとっては日本語以外にさらに２科目になる。私は、香港中文大学地理学科卒（1975年）、アジア工科大学院大学人間居住計画の修士課程修了（1977年）、そして２年近く香港社会福祉協議会で新都市の社会福祉施設計画担当を経たので、市大の後期博士課程の入学を希望したわけである。文学部は、私個人とこれからの留学生受入れの門を開くため、留学生の特別入試制度（すなわち、専門科目のほかに、日本語および１科目の外国語）を新たに設置した。

何故日本にきたのか。香港より海外に出た留学生は、戻る際に資格の認定問題のため、ほとんど英連邦もしくは英語圏の国家へ留学していた。私の勉強したい分野（都市政策、地理学）では、多くの先輩が英連邦にいった。代わって、私は香港へ情報伝達が空白である日本へ行ってみたかった。経済発展した日本は、都市計画や住宅政策などはいろいろ参考すべきものが多くあると信じた。また、高層高密度の大都市景観は香港と共通である。ほかに、文部省奨学金による生活的支持と、当時ガールフレンドであった現在の家内の精神上の支援も頂き、日本大学院の留学の実現につながったわけである。

市大との縁は、まず工学部都市計画研究室の濱田学昭先生の紹介で、当時地理学教室で都市地理学を専門としていた小林博先生（日本都市学会関西支部部長）と会うことができた。また、家内が市大へ受入れ情報を求めるのも、おそらく義父は市大商学部の前身を卒業した関係もあったかもしれない。

院生の学業成績について一言述べたい。日本に滞在する留学生の場合には、ビザの延長のため、入国管理局へ年に一回申込書類を提出しなければならない。その際、学部発行の成績表を提示することとなっている。ある日、申込書および大学より密封した書類を提出して、しばらく、入管の担当官が「ご自身の成績はご存知ですか。」と聞かれた。「いいえ、知りません。」と答えた。それで、その年度の６科目が全優の成績表を見せてくれた。激励という意味だろうと思った。翌日、大学で同窓の院生にたずねたところでは皆同じような採点だったようである。大学院では、学内の採点は、あまいが、重要なのは、学会発表や、学会雑誌投稿の採用ということであろう。

いろいろな方から授業を受けた。小林先生のアメリカの都市地理学の演習、春日先生の地域政策論、ドイツ地理学者の文献解釈、服部先生の歴史地理学の演習、中村先生の旧ソ連を中心とする地誌学演習、平野先生の災害地理学と空中写真判読の授業などは、今なおありがたく記憶に残っている。ほか

に、非常勤講師として、河野通博先生（中国地理学）や山田誠先生（都市地理学）も来られた。

同窓院生の中で、私より年長の方は、秋山道雄、上原秀明、高山正樹がおり、より若い方は、大場茂明、年代雅夫、川端基夫、野尻亘がいた。院生同士は、時に自発的に共同研究や研究会を行った。私の参加した研究会は、山野先生の推薦したRobert Sack著のConceptions of Geographic Spaceであり、英和翻訳のノーハウも兼ねた練習と互いのコメントを通して、上達の方へ向かった。言ってみれば、院生生活の大事な体験とは、自由に研究テーマを選べること、互いに刺激し合う討論への参加、マイペースで研究の推進ということであろう。

最後に、1983年に小林博先生の退官記念の際、東南アジア調査旅行の日程作成を手伝った。現地調査のほか、シンガポール国立大学・香港中文大学の地理学科教室への表敬訪問も行われた。

＜近況報告＞

1990年から山口県の徳山大学経済学部に赴任して以来、10年目になったところである。折畳み自転車を駆使して県内および県周辺を回っている。同大学では地域経済論、経済地理学、教養ゼミ、卒論指導を担当し、また、同法人系列の女子短大で国際理解も講義している。

（昭和62年大学院後期博士課程単位取得退学）